病院図書館　2005；25(3)：89-91

特集　図書館ネットワーク

近畿病院図書室協議会の現状と課題

林 伴子

Ⅰ．はじめに

近畿病院図書室協議会（以下病図協と称す）は京阪神の病院図書館員を中心に1975年に創設された。創立当時の経緯については病図協の15周年ならびに25周年を記念して刊行された会誌「病院図書館」（旧「病院図書室」）10巻[1]、20巻4号[2][3]に繰り返し報告されている。

病図協の発足当初から、図書館間のネットワーク活動の充実が協議会活動の主たる目的として挙げられてきた。

現在加盟機関数は129となり、ネットワークとしての役割を期待しての入会も多いと思えるが、病図協の現状と今後を探る手掛かりとして、ネットワークの果たす役割を今一度考えてみたい。

Ⅱ．ネットワーク活動

『広辞苑』第5版で「ネットワーク」を引いてみると、「網細工・網状組織の意」とあり、「①多数のラジオ・テレビ局がキー局を中心にして組織している番組提供網 ②コンピューター・ネットワークの略」とある。インターネットで検索してみると、ほとんどが「地域の活動を取り上げたもの」という意味合いで使用されている。

では、病院図書館におけるネットワークとは？と改めて問い掛けてみると、情報入手のためのネットワークという面が一番重要視されているように思う。1984年に病図協から編集・発行された『医学資料の整理と利用』には、病図協の相互協力活動の章の中で「情報ネットワークについて」として紹介されている[3]。20数年たった今ではインターネットの普及により、情報ネットワーク環境は様変わりし、情報の収集そのものは容易になった。そして現在、ネットワーク活動に優先して求められているのは、文献入手といった実利的な面であるように思える。

しかしネットワークの果たす役割はそれだけではない。相互に影響し、担当者の資質を高めていくための教育的役割も果たしており、研修会や会誌による広報などの相互協力活動のすべてがネットワーク活動といえるのだが、残念ながらすぐに役に立つもの以外は軽視されがちである。

情報の入手は、病院図書館担当者の日常業務では欠かすことのできないものではあるが、そのことだけに終始していては、担当者としての専門性の獲得にはつながっていかないのではないだろうか。ただ日常の業務をこなしていくだけではネットワーク活動として十分とはいい難い。また、何らかのネットワークの中に組み込まれただけで安穏としていては、当面の益を受けることができたとしても、「活動」が伴わない限り、所属していたはずのネットワークがその機能を発揮しなくなることも有り得ると考える。

Ⅲ．近畿病院図書室協議会のネットワーク活動

さて、病図協では事業活動として

1．資料の相互利用

2．図書室担当者の教育・研究活動

はやし　ともこ：社会保険神戸中央病院

3．出版・広報活動
4．統計調査

を挙げている。近年ではインターネットの普及とともにホームページの開設と利用の推進を図っている。

以上のどれをとっても、各加盟機関の活動への参加がなくては成り立たない事業である。

前述したように資料の相互利用の面が重要視されがちであるが、利用するためには加盟機関が同じ条件で資料の提供ができることが前提となる。そのためには担当者が必要であり、さらに専門知識を習得することが速やかな業務の遂行につながるのである。

近年の情報量の増大化は周知のことではあるが、医学医療情報も例外ではなく、担当者も常に情報収集をはからなければならない時代になってきた。そのためには専門知識が有効であり、そこにネットワークでの教育活動の重要性を見いだせる。病図協では、年4回の研修会と年数回の勉強会というペースで教育・研究活動を行ってきた。ただ残念なことに、会員数の増加の割には研修会参加者数は増えていない。研修会などに参加することによって得られる人的ネットワークは、少ない人数で業務をこなしている担当者にとっては、それぞれの機関の中で得られる以上のサポートを期待できるものとなると思えるだけに、できるだけ参加してもらえればと考える。

出版・広報活動も同様に日常業務で必要とされる情報や、新たな知見を提供することによって、病院図書館の動向を知ることができ、担当者の専門性の向上に寄与している。

統計調査では病院図書館の実状を知ることができる。2003年度の調査では回答率が63％であった。データとして十分ではないにしても、病院図書館の現状を反映し数値化された資料としては意義あるものとなっている。

以上4つの大きな事業活動以外に、病図協では他のネットワークとの交流も行っている。地域性もあって、特定非営利活動法人日本医学図書館協議会近畿地区例会にはオブザーバーとして出席し、また共同でシンポジウムを開催するなど交流を深めている。その他関連団体のネットワークとしては病院図書室研究会をはじめ数多く存在するが、それらのほとんどは個人会員で組織されているため、会としての交流だけでなく個人レベルでの交流も図られている。

Ⅳ．近畿病院図書室協議会の現状と今後

現在の病図協の事業活動は、研修部、編集部その他各部の活動によって成り立っている。一見順調に流れているかに見えるが、部員の確保が難しく、なかなか計画通りに活動が進んでいないのが実状である。

会員数だけをみれば近年は増加してきたが、担当者の専任化は進まず（1999年度統計：専任67％、2002年度統計：専任40％）、他部門との兼任が増加してきた。病院機能評価を受審する病院が増加しているが、図書室は環境整備の面のみ強調されているようである。そのためか、診療情報管理と兼務している担当者がことに多くなってきたように見受けられる。さらに、専任の場合でも嘱託職員・派遣職員が増え、常勤職員であっても内部での異動が多く担当者が短い周期で交代しているようで、2002年度統計では5年未満の経験年数の担当者が61％を占めていた。

ここ数年内には創立当時より病図協を支えてきた諸先輩が第一線から退くことになる。それまでに、いかに世代交代を行うかが今の病図協の最大の問題と言えよう。

事業活動に必要な人員の確保すら困難な時期に、病図協の行く末を担っていくための人材の確保は急務であるが、同時に非常に困難な課題である。以下は私見であるが、打開するためには会員それぞれが病図協の活動のために何ができるかを考えることから始める以外にはないように思う。ネットワークの存在はあるだけで安心し、安住できると思いがちである。そう思うのは活動できる人員があってこそである。病図

協は、他の病院図書館ネットワークとは違い機関加盟である。その利点を今まであまり考慮せずにきた面を是正し、一部の会員に偏りがちだった負担を軽減することを考えていかなければならない。もちろん、病図協の事業活動を担うに当たっては「負担」がかかるだけではない。当然得られるものも大きい。正の部分と負の部分があることは致し方ないが、組織・ネットワークとして存在し続けるためにも、会員（担当者だけでなく、所属する機関）が真摯な態度で検討を始める時期であろう。

V．おわりに

私が病図協の事務局長となって２年目が経過した。2004年度は財団法人日本学会事務センターの破綻といったアクシデントに見舞われ、また病図協設立30周年でもあったため、その後の処理や記念事業に奔走してきた。2005年度は表面上大きな問題は無いかに見えるが、内情としてはなかなか厳しく、2004年度から2005年度にかけて担当者の交代も多く、事業活動への影響も大きい。

なかなか安定しない将来像に向かって何ができるのか日々問い掛ける毎日であるが、こんな時こそ今まで病院図書館の発展に寄与してきたとの自負を忘れずにいたい。そして今後の発展のためにも若い世代の台頭を期待したい。

参考文献

1）特集：設立15周年記念号．病院図書室．1990；10：1-131.
2）重富久代：近図協設立時の思い出．病院図書館．2000；20(4)；169.
3）松本純子：設立当時を振り返って．病院図書館．2000：20(4)；170.